足立区教育委員会指導力向上中核校

渕江小学校　外国語・外国語活動研究通信

第1号
令和2年7月

梅雨明けが待たれる毎日ですが、先生方におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、今年度の最初の本校の研究授業を奥田　健介　教諭が行いました。コロナ禍ということで、ビデオ撮影を予め行った上での研究協議でしたが、クラスルームイングリッシュや振り返りカードの活用、評価等について活発な意見交流が行われました。

指導講評では、外部講師より、クラスルームイングリッシュを効果的に使う方法やアルファベット指導の方法など、具体的にご指導いただき、研究を深めました。

研究主題

関わり合い、学びを広げ、深める児童の育成
～思いを豊かに表現できる授業づくりを通して～

授業者：5年2組　担任　奥田　健介　教諭

単元名：Unit　2　When is your birthday?　（6／8）

指導講評：外部有識者

〈協議会の様子〉

協議会では、研究経過報告と奥田教諭の自評があり、本時についての協議へと続きました。

〈研究経過報告〉

・区教育委員会が作成した指導案をもとに、学年で改良してきた。
・ふり返りカードでどこでつまずいているかを確認し、「月」の言い方があまり理解していない児童がいたので“Twelve months”の歌を活用した。
・エンドプロダクトを単元の初めに示すことで、児童は意欲をもって参加することができていた。
・教師自身がクラスルームイングリッシュをより使えるようにするために、台本を作ったり、教室の梁に掲示したりしたので徐々に使える英語が増えていった。

〈授業者自評〉

・教師自身が自信をもって英語を話すことによって子供にも熱意が伝わったと思う。
・エンドプロダクトを示したことで、単元を通して、意欲を継続させることができた。
・英語が得意で、自信のある児童から指名することで、その児童の発言をもとに、他の児童が学習内容を理解できるよう、指名の工夫をした。
・既習表現は英語で、込み入った活動の説明は日本語で伝えるようにし、なるべく教師が英語を使うようにした。
・単元が進んでいくにつれて、子供たちの小さなつぶやきが増えていった。

〈研究協議〉　◎良かった点　△課題点　□質問

◎クラスルームイングリッシュをしっかり使っていた。しっかり授業の台本を作るなど、努力の成果を感じた。自然に英語で

話せていた。リズミカルで聞きやすかった。先生の反応が良かった。身振りなどの動きも良かった。子供たちが先生についていった。

△アルファベットを板書するときは、線があると児童も見やすい。

△フレーズを短冊にし、行事の絵カードを掲示すると、児童が発話のヒントにでき、わかりやすくなる。
最初は見せて、後半から見なくても発話できるようになるのが理想である。

□マスクをしているが、チャンツの時は口もとを見ると、それぞれの児童が声を出しているか見とれるのではないか。→注目してほしいフレーズがあり、電子黒板の文字を指し棒でさしていたが、児童の様子も見なければならないと思う。

□急にアルファベットを書く活動に移ったが、それはよいものなのか。
→一区切りつけて アルファベットを書かせる。今思うとふり返りの後に書かせたほうが良かったかもしれない。

□伝えあう時間がもっとあると良い。

□コロナの影響で活動はどこまで許されているのか。
**→各学校で対応はちがっている。発話については、同じ方向でマスクをつけていれば良いと考えている。
感染症対策しっかりしていき、配慮しながら活動をして、できるだけリスクを下げていく。**

□アドバイザーの役割は
→一番は発音の面でリードしてもらっている。授業の中で、英語でどう指示を出したらよいのか、わからなくなったときには、いつもさりげなくフォローをしてもらっている。また、単元の計画を一緒に話し合い、打ち合わせがしっかりできるときには、役割についても決めている。

〈指導・講評〉

・児童との信頼関係がしっかり表れた素晴らしい授業であった。クラスルームイングリッシュを積極的に使い、児童とのやり取りを大切にしていた。使いやすいクラスルームイングリッシュを60個リストにしたので、参考にしてほしい。

・デジタル教科書から聞こえるネイティブスピーカーの発音を児童にしっかりと聞かせ真似をさせたい。例えば「マネマネタイム!」と称し、児童に聞こえたままをリピートさせてみる。

・アルファベットの小文字を書かせる指導例として、各文字が 4 線のどこに書かれているかジェスチャーで表す活動を紹介した。※具体的には、4線の一番上から三番目のベースラインまでに書かれる b,d,f～、4 線の二番目からベースラインの間に書かれる a,c,e～、4 線の一番下の線まで伸びる g,j,p～、の3種類に分け、拍手をする手の位置を変えることで文字を覚えさせる。体を使って表すことで児童は楽しみながら意欲的に覚えることができる。
※資料参照

・キーセンテンスは何度も繰り返し言うので、正しいアクセントの位置を定着させたい。 ※資料参照

〈学力定着推進課 継続活指導主事より 研究協議会終了後、C4th個人連絡にていただきました〉

会話の広がり

児童と 1 往復の会話で終わらせず、関連した質問をして会話を広げていくと「即興で話す力」を育成することにつながる。また、国語や算数の授業と同様に“Why (do you think so)?”と尋ねることで、理由や根拠に基づいて、論理的に「自分の考え」を話す力を育成することにつながる。児童の答えは「簡単な単語レベル」で。難しい時は「日本語」でもいいと思う。大切なことは児童に「思考」させることである。

ペアで練習する時間の確保

○ クリスマスとお正月に自分が欲しいものをペアで尋ねあう部分で、十分に時間をかけていた。

○ 児童は楽しそうに本当によく話していました。むしろ「早く話したくて仕方がない」状態だった。

▲ 反対に言うと、それまでの説明（練習）が長く、もしかしたら飽きていた児童もいたかもしれない。

児童の反応を確かめながら効率的に進めることで時間を捻出し、状況によっては思考力・判断力・表現力の観点から、表現の一部を変えたり、一言付け加えたりする「プラスワン」に取り組めるかもしれない。なお、思考・判断・表現の観点で「A」となる模範を示し、練習しない限り、記録に残す（単元の総括としての）「評価」はできない。足立区の指導案にも盛り込んでいくことを検討している。

評価について

「できている児童」をまず把握する。そして不十分な児童を中心に指導して、「できる」状態まで引き上げる。まさにそのとおりである。形成的評価の段階で C の児童を、記録に残す評価（総括的評価）の際に B まで引き上げるとともに、評価 A となる見本や例を適宜示し、上位層も伸ばしていく視点も大切にしたい。

教科となり「聞くこと」「話すこと」は「定着」が求められる。定着には様々な方法が考えられるが、欠かせないのは「練習量」である。児童が「考えて」聞いたり話したりする「コミュニカティブ」な練習と、文構造や表現の定着を図る「ドリル」的な練習の両方が必要であり、そのバランスが大切である。